注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
【モンハン】二人のハンター物語

【作者名】
棟色の氷

【あらすじ】
モンスターを狩って人々を守り、モンスターの亡骸にまた命を吹き込み剣、弓、鎧兜などの武具とし、それをつかってまたモンスターを狩る者達ーーーー即ちハンター。
そんなハンターの一人である少女・シエナと少女・サラの物語です。
ある日、倒れていたシエナをサラが助けて二人は出会った。
それは運命だったのかも知れない・・・・
二人はコンビを組むこととなり、少女達の狩猟生活が始まる！
※サラはもう狩猟生活がとっくに始まっていたもようです。

序章　二人の出会い

「ここは・・・どこ？」
長い黒髪と街を歩けば振り向いてしまうような可愛らしさが特徴の
少女が突然目を覚ました。
彼女の名はシエナ。
数ヵ月前にある【職種】に【なる】ことができたばかりだった。

ーーー雪山
世界のとある場所にある万年雪が特徴の生物が暮らすには過酷な環境。
普段人が入ることを許されないそこに少女はいた。
少女ーーーシエナがこんな場所にいる理由・・・
それは少女の纏っているやや無骨な、くさりかたびらに見える銀色の軽装と
普段背負っていて、いまは傍らにある【弓】で
簡単に理解することができた。
シエナは人々の生活を脅かす異形の怪物【モンスター】を狩る職業である
モンスターハンター、通称【ハンター】と呼ばれる者達の一人であった。

「あ、目が覚めたのね。」
近くで艶やかな、しかし幼さも残る女の声がした。
声からして１０代だろう。
一拍置いて

「はあ、よかったぁ」
と女・・・いや、少女が言った。
「ようやくお目覚めね、眠り姫様っ。」
少女がシエナの顔を覗き込んで、緊張が消え去ったためか安心したような声で言った。
年は少女と同じくらいだろう、夕焼けのような美しいオレンジ色のショートヘアーで棟色の目には少しだけ、涙の跡がある・・・ように見えた。
整った顔立ちで、いわゆる美少女だった。
「あ、あの～、ここはどこなんでしょうか?」
少女が振り向くと、シエナは上半身を起こして少し戸惑いながら聞いてきた。
「ん?ここは雪山のベースキャンプよ。」
少女が答えた。

そう言えば、いまいるテントには見覚えがあった。
少し辺りを見回すと青い支給品ｂｏｘがみえた。
「あなたはこの雪山の洞窟の中で倒れていたのよ。
私達がそこを通ろうとしたときに山菜爺ィに呼び止められてあなたを見つけてここまではこんだのよ。」
少女はシエナに簡単に成り行きを説明した。
ここにいるということは、彼女達もハンターだった。
しかも、素人でもわかるような最高級の装備、リオソウルＵとよばれる、
見ることとさえ難しい蒼色の火竜の甲殻などをふんだんに使用した鎧だった。
しかも、テントの隅には、鮮やかな青色の長槍と、同色の盾が立て掛けられていた。
シエナはその武器について知らなかったがこれはラギアクルスという危険なモンスターの素材でつくられた【雷震槍ドーリス剛】というリオソウルＵシリーズと同じく

最高の装備だった。
「あの、わたしはシエナっていいます。
たすけて頂いて本当にありがとうございました！」
シエナが立ち上がって頭をさげた。
少女は顔を赤らめて慌てたようすでそれを受け流す。
「いいのいいのっ、困ったときはお互い様でしょ？
・・・っと自己紹介がまだだったわね、私はサラよ。」
サラは少し恥ずかしそうに、ちょっと目を逸らしながら手を差し出した。
・・・それが、二人の出会いだった。

１章　１幕　それぞれの帰還

まちがえて
直接入力で本文を前書きに書いてしまったので
ここに後書きを書きます；

どうも、棟色の氷です。
記念すべき第一話は、こんな形となりました。
やらかしました。
ＰＣが使えるときに直します。
ていうかＰＳＶＩＴＡからの投稿疲れるんだよぉ（泣）

本編についてですが
今回は帰郷ということで戦闘シーンはなしにしました。
どうせバレてると思いますが
シエナの話に海の近くの村で大きな地震があったというのがあったので
いつかは「アイツ」とたたかいます。

入浴シーンは
年齢制限タグをつけるのがいやだったので
会話のみにしました。

まだまだ読めるようなものではないですが応援よろしくお願いします。